

姫たちの戦国

徳川秀忠の妻お江②

一龍斎貞花

講談師

戦国一の美女といわれたお市は、3人の娘を連れて柴田勝家に嫁ぎます。勝家独身とはいえ側室が12人、年齢も56歳と61歳の2つの説、お市の方37歳。勝家は信長に尽くしてきた武将、太閤記などで秀吉のライバルとして悪役に描かれているが、策略など出来ぬ無骨者、直情型ではあるものの部下思いの優れた武将。主人の妹を妻に迎え、3人の娘をきちんと成長させなければと可愛がります。しかし秀吉との賤ヶ岳の戦いに敗北。「信長公の妹、粗略に扱うまい、娘たちのためにも落ちよ」と勧められるも、お市は死を覚悟、浅井長政の時は城を出た、幼子たちのためでもあったが、兄信長も健在だった。しかし今度は「長政を殺し、兄の織田家を乗っ取り、この私を側室にしようなどという恨み重なる秀吉の思い通りになってたまるものか」

「茶々、そなたは浅井の血を残しておく

れ。お初は、姉と妹の中に立って姉妹3人を強く結んでおくれ。お江、そなたは大好きであった伯父上信長様のような強い心をお持ちです、その強い心でなにかあっても負けず織田の血を残してくださいよう」燃え盛る北ノ庄城内にて勝家と共に自刃、お市の方37歳。一緒にと死を望んだものの、茶々17歳、初14歳、江11歳にして2度の落城をお味わい秀吉の元へ。

お江 3度の結婚

お市の面影を有した美女の茶々をなんとか我がものにしたいと目論む秀吉は「お江、尾張大野城主佐治一成かすなりに嫁ぎなされ」一成は、お市の姉の子といういとこ同志「叔父上に似てるという私が邪魔なのでしょう、母上は織田の血を残せと申されました、私は参ります」と12歳で輿入れたものの、秀吉と家康が生涯ただ1度戦った小牧山合戦の折、一成が家康に助力したので、お江は呼び戻され強制離婚。お初を京極高次に嫁がせるや、念願の茶々を側室に。茶々は鶴松を出産、秀吉大喜びで茶々のために淀城を建てて住ませたところから、淀殿、淀君と呼ばれるようになり、小田原攻めの時、秀吉は北の政所に手紙を送り「わしはお前を一番愛している、長い戦いになるので淀を小田原へ送ってくれ」本妻を立ててはいるものの、女房よりめかけというんですから、こりゃおねねさん面白いわけがありません

ん。愛人お持ちの方、呉々もお気をつけ下さいよ。

鶴松は2年で病死。「なんとしてもお世継ぎを」と淀君執念をもやし、秀吉の子であるかないかともかく秀頼を出産。

お江は、秀吉の姉の子羽柴秀勝と2度目の結婚を申し渡され、すぐに懐妊^{みだ}し完子を出産、この出産と前後して秀勝は出陣中の朝鮮にて病死、結婚してひと月後に出陣したのでわずか1ヵ月の結婚生活。すると3年後、「お江よ、徳川秀忠に嫁げ」「秀忠殿へですか」「天下様の仰せですよ、そなたは織田家の血筋、秀忠殿のお子を産み秀頼を支えるのです。そして完子は私に下され」「姉上は父の仇と憎んでいた秀吉の側室となり、すっかり変わってしまった」

すでに2度の結婚、今更という気持ちです。秀吉にとって、信長の妹の子ですから政略に最高の持ち札です。

長男信康は信長に切腹させられ、二男は秀吉の養子となった結城秀康、このため三男秀忠が家康の後継者。「姉は秀吉の子を産み実権を握っている、ならば私も秀忠殿の子を産み、強く生きていこう」娘をとられるわで、そう思ったのも無理からぬことでしょう。

相手は6歳年下でしかも初婚、お江は3度目だ、徳川は豊臣政権下の一大名、その豊臣から送られてきた女房、これはもう秀忠は妻に逆らうことは出来ません。

お江は結婚生活をリード、2年後長女千

姫を出産するや、秀吉は「目出度い、千姫は秀頼のいいなづけにする」またも女は戦略の道具にされてしまった。

さらに2年後、二女珠姫を出産、今度は家康から、後に前田家三代名君といわれる利常へ、わずか3歳で輿入れを申し渡され、幼い娘の出立を天守から涙ながらに見送ったお江。

お江は、独占欲が強く、嫉妬深く烈しい女性だったといわれますのも、妻として多くの子を産めば姉のように強い立場になれる、なんとしても男の子を産まなければと側室を許さず、「ねえ、あなた来て」と自分から閨^{ねや}を共にしたのではないのでしょうか。親父は強いカリスマ性があり女房も強い、これではおとなしい秀忠は、父にも女房にも頭が上がりません。



日の本は女ならでは夜が明けぬと申します。女偏は138もあるのに男偏はなし、ものの始まりも女偏から。昔は女が家にいて男が通っていたから嫁。

妙なる女性はい、イエイエ。女の良いのが娘、古いのが姑。〆の中に女がでんと坐っているので安、への中に男である王がいて全、男が上ならば全安のはず、それが女性上位で安全、やっぱり女房の尻に敷かれているのが安全。女性パワーの年、女性を大切にしましょう。

どうもお退屈さま。お江は次回連続に。